

得新郎一詞

語物氏源

一卷



山田孝雄校閱
谷崎潤一郎新譯

源氏物語

一卷



中央公論社



源氏物語卷一 定價二百八拾圓

昭和二十六年五月二十日印刷

昭和二十六年五月三十日發行

譯者谷崎潤一郎

校閱者山田孝雄

發行者栗本和夫東京都千代田區丸の内二の二

印刷者村尾一雄東京都新宿區加賀町一の一二

發行所中央公論社東京都千代田區丸の内二丁目

丸の内ビルディング五九二區

電話和田倉一一二一番振替口座東京三四番

源氏物語舊譯序

私が中央公論社の嶋中社長から、源氏物語を現代文に直してみたらと云ふ相談を最初に受けたのは、昭和八年頃であつたかと思ふ。私は前から源氏が好きであつたし、その翻譯と云ふことにも興味を感じてはなかつたが、しかし何分にもこれを完成するためには數年間の努力と根氣とを要する仕事であるから、もし嶋中氏の提案と熱心なる慫慂とがなかつたならば、斯様な企てに手を染めるべくもなかつたのである。事實私は、さう云ふ話があつてからも猶暫くは躊躇してゐたのであるが、山田孝雄博士が校閲の任に當つて下さると云ふ吉報などに激勵されて、昭和九年の末頃からぼつ／＼そんな心積りをし、昭和十年の九月から實際に筆を執り始めた。そして、本年、即ち昭和十三年の九月に至つて、兎も角も第一稿を書き終へることが出来た。

茲に第一稿と云ふ所以は、私は決して今書き上げたものを以て完璧とは信じてゐないからである。元

來私は非常な遅筆なのであるが、此の、自分の原稿用紙にして三千三百九十一枚になるものを書き終へるのに、満三箇年を費したとすると、一日平均三枚強と云ふ速力になる。尤もその間に、中篇小説一篇を書くために二箇月程割いたことがあり、去年の四月には痔瘻で一箇月程入院したことなどもあり、又毎年三四回は已むを得ぬ用事で上京する等のがあつたが、それらの日を除いた既往三年の間と云ふものは、他の一切を放擲して、全然助手を使はずに自分一人だけで此の仕事に没頭し、殆ど文字通り「源氏に起き、源氏に寝ねる」と云ふ生活をつづけた。時には午前四時五時から午後十一時十二時迄机に向つてゐたことも珍しくなく、日課とする夕方の散歩の時間、手紙一本書く暇をさへ惜しんだ程であつた。斯くてやう／＼これだけのものに纏め上げた譯なのであるが、まだ現在のところでは、一往「しまひまで書けた」と云ひ得るに過ぎない程度で、なか／＼満足な出来榮えには達してゐない。たゞ幸にして此の全巻を刊行し終る迄には、今後尙一年一箇月の日子があるので、その間に更に推敲を重ねつゝ印刷に附するつもりである。否、出版後と雖、私にして若し餘生があれば、暇にあかして心行く迄修正することを老後の楽しみにし、さうしていつかは、ほんたうに完璧なものとして世に送り出したいと思ふのである。

次に此の書を読まれる方々にお断りしておきたいのは、これは源氏物語の文學的翻譯であつて、講義ではない、と云ふことである。云ひ換へれば、原文に盛られてある文學的香氣をそつくりそのまゝ、

とは行かない迄も、出来るだけ毀損しないで現代文に書き直さうと試みたものであつて、そのためには、原文の持つ含蓄と云ふか、餘情と云ふか、十のものを七分ぐらゐにしか云はない表現法を、なるべく踏襲するやうにした。翻譯文が原文よりも長くなることはどうしても防ぎ得ないけれども、努めて饒舌にならないやうに、言葉の分量と種類とを節して、原文のあの曖昧さ、幾様の意味にも取れるやうな云ひ方から生ずる陰翳を、わざといくらか残すやうにした。それで此の書は、口語で書いてある限りに於いて、原文よりは現代人に分り易いに違ひないが、だからと云つて、全然辭書や注釋書等を用ひることなしに、悉くを理解する譯には行かないであらう。たとへば諸君が、現代作家の作品を讀む場合でも、普通はそれが現代語で書かれてゐるが故に分つたやうな氣がして讀過するのであるが、若し學校で古典を解釋するやうに一字一句について詮索し出したら、矢張字引を引くなり講義を聽くなりしなければ分らない箇所が相當に出て來る、それと同様だと考へて戴きたい。そして私の趣意とするところは、あまり學究的にならずに、普通の人が普通の現代小説を讀むやうな風に讀んで戴きたいのであつて、典據だとか、故實だとか、文法だとか云ふものゝ詮議に囚はれると、その瞬間に藝術的感興は飛んで行つてしまふのである。

さう云ふ譯で、此の書はそれ自身獨立した作品として味はふべきもので、原文と對照して讀むためのものではないのだけれども、しかしそのことは、原文と懸け離れた自由奔放な意譯がしてあるとか、

原作者の主觀を無視して私のものにしてしまつてあるとか云ふやうな意味では、決してない。正直を云ふと、此の原作の構想の中には、それをそのまま現代に移植するのは穩當でないと思はれる部分があるので、私はそこのところだけはきれいに削除してしまつた。(中略)が、その他の部分では能ふ限り原作者の藝術的境地を尊重し、可なり忠實に原文に即いて行つたつもりで、少くとも、原文にある字句で譯文の方にそれに該當する部分がない、と云ふやうなことはないやうに、全くないと云ふわけには行かぬが、なるだけそれを避けるやうにした。であるから、原文と對照して讀むのにも役立たなくはない筈であり、此の書だけを參考としても、随分原文の意味を解くことが出来るやうには、譯せてゐると思ふのである。たゞ何處までも文學的と云ふことを主眼にし、語學的翻譯をしたのではないから、細かい言葉の末節迄も一致してゐるとは云ひ難く、時には、現代文としてはかうした方が効果があると信じた場合、故意に原文の意味を歪め、ぼかし、ずらし、などしてゐるところもないではない。

前にも云ふやうに、此の仕事は嶋中社長の庇護と鞭撻の中から生れたやうなものであるが、一面山田孝雄博士の懇切な指導に負ふところが甚だ少くないことを感ずる。私が博士のお宅へお願いに上つたのは、博士の名前を看板にお借りしたいからではなく、實際に叱正の筆を執つて戴きたいからであつたが、博士は私が豫期した以上に、十二分のことをして下すつた。その校閲は頗る嚴密丁寧を極め、

單に誤譯を訂正して下さるばかりでなく、文章上の技巧、表現の仕方等にまで周到な注意を與へられ、往々にして校正刷が眞赤になつたくらゐであつたが、これが私をどのやうに力づけてくれたか知れない。此の書がどれほど原作の味はひに肉薄し得たかは、大方の批判に待つとして、博士の援助がなかつたらば、今あるやうな程度のものにも成し得なかつたことは確かである。

その外、此の方面に於ける先人の研究のお蔭を蒙つてゐることは云ふ迄もないところであるが、現代文に譯す上には、何と云つても口語で書かれてゐるものが一番參考になる譯であるから、その意味に於いて、特に明治以後現在もなほ盛に出版されつゝあるあらゆる種類の翻譯書、注釋書、講義錄等が、多大の援助を與へてくれたのであつて、私はこれらの先輩諸家や新進國學者の述作にも、深く感謝しなければならぬ。(下略)

名も知れぬ草にはあれど紫の

ゆかりばかりに花咲きにけり

昭和十三年十一月

源氏物語舊譯序

潤一郎しるす

源氏物語新譯序

願れば、私が中央公論社の前社長嶋中雄作氏の慫慂に依つて源氏物語の現代語譯を思ひ立ち、始めて稿を起したのは、今からほゞ十六年前の昭和十年九月であつた。そして漸くその稿が成り、十四年一月に第一卷の上梓を見るに至つたのであるが、時恰も日華事變の最中であつたゝめに種々な障害に遭遇して續卷の發行が遅々として進まず、辛うじて十六年の七月に最終卷である第二十六卷を出すことが出来、兎も角も初志を貫徹したのであつた。しかし私は、當時の序文にも書いた通りで、一往しきひまで譯し終へたと云ふに止まり、決してあの翻譯の出来榮えに満足してゐたわけではなかつた。私はあの序文に、「私にして若し餘生があれば、暇にあかして心行く迄修正することを老後の樂しみにし、さうしていつかは、ほんたうに完璧なものとして世に送り出したいと思ふ」と云つてをり、又第二十六卷の奥書の中でも、繰り返してその旨を明かにして置いたのであつた。然るにそれから十年の

星霜を経た今日、再び此の新譯を以て世に問ふ機會がめぐつて來たことは、眞に何と云ふ幸運であらうか、そゝろに感慨無量なものがあるのを覺える。

舊譯に對して私が満足出來なかつた點は、たゞにその譯文の拙劣にのみあるのではない。あの翻譯が世に出た頃は、何分にも頑迷固陋な軍國思想の跋扈してゐた時代であつたので、私は分らずやの軍人共の忌避に觸れないやうにするため、最少限度に於いて原作の筋を歪め、削り、ずらし、ぼかし、などせざるを得なかつたのであつた。而も私が翻譯の業に従ひつゝある前後五六年の間に、事變の様相が次第に深刻さを加へるにつれて、軍の壓迫がますます苛烈になつて來たので、私は最初に考へたよりも、より以上の削除や歪曲を施すことを餘儀なくされた。此のことも亦あの奥書の中に明記して置いたのであるが、ありていに云ふと、當時私は、古典文學の紹介や解明までがこんな極端な束縛を受けるやうな事態は、遠い昔は勿論、明治大正時代に於いてもつひぞなかつたことであるから、恐らくは斯様な暗黒時代がさういつ迄も續く筈はなく、やがて再び自由な時代が戻つて來るに違ひないことを、ひそかに豫期してゐたのであつた。その後我が國は無謀な大東亞戰爭に突入し、敗戦の憂き目を見た結果として、私の望んでゐた自由な時代は豫期以上に早く復つて來、源氏の翻譯を完全なものにしたいと云ふかねての夢を、こゝに實現し得る運びになつたのであるが、それにつけても今日これを喜んでよいのか悲しんでよいのか、私は云ふべき言葉を知らない。

私は前に舊譯の文章を拙劣であると云つたけれども、敢て正直のことを云はして貰ふなら、あれでもあの時としては私の力の及ぶ限りのことをしたので、今讀み返して見ても、あの出來榮えをさう不満足には感じないのである。たゞあの譯文は、原文に於けるよりも一つ／＼の文章の構造が複雑になつてをり、原文では簡結な單文を以て綴られてゐるのに、譯文ではそれらのいくつかを接續詞を以て結合させた、長い形の複文になつてゐる箇所が多い。當時此のことを指摘して批難する人もあつたけれども、そのことは夙に私自身が心づいてゐたのであつて、私の欲したのは、徒な批難でなしに、もしもあゝ云ふ文體に勝る文體が他にあり得るなら、實例を以て示してくれることであつた。而も私は、苟くも原文の色、匂、品位、含蓄等を傳へようとする文學的翻譯であるからには、私の選んだあの文體に勝る文體はあり得ないものと、心中自負してゐたのであつた。尤もあの文體では、原文の持つ流麗さは傳へられるにしても、簡結さを傳へることは不可能であつたが、それはいかんとも仕方がなかつた。もと／＼翻譯と云ふ制肘を受けてゐるからには、原文の具備する總べての長所を悉く移植しようとしても無理であることは分つてゐたので、私は原文の一方の長所である簡結を捨て、流麗の一面を生かすことに努めたのであつて、此の點はどうにも不満足であつたけれども、已むを得ないことだと思つてゐた。

それで私は、今度も最初は、矢張舊譯の文章を骨子とし、それを訂正し増補する方針で行くことにし

てゐたのであるが、それにしてもあらゆる困難を克服して今少し原文に肉迫する道はないであらうか、さうでなければ折角新譯を試みる意義がないではないか、と云ふ考が次第に強まつて來たのである。で、最近に至り、急に私は前の方針を一擲して新たに三つの原則を立て、それに律つて行くことにした。即ちその原則と云ふのは、一、文章の構造をもつと原文に近づけて、能ふ限り單文で行くやうにすること、一、舊譯ではなほ教壇に於ける講義口調、乃至翻譯口調が抜け切れてゐないと云ふ批難があつたのに鑑み、今度は一層、實際に口でしやべる言葉に近づけること、一、舊譯では敬語が餘りに多きに過ぎ、時とすると原文よりも多いくらいであつたのは、確かに缺點と云ふべきであるから、今度は敬語の數を適當に加減すること、の三つであつて、私は此の原則に添ふために、舊譯の文體を踏襲することを斷念し、新しい文體に書き改める決意をした。しかし果して何處まで此の原則を守り通せるか、かりに守り通せたとしても、豫期したやうな効果が擧るものかどうかは、今のところよく分らない。それは偏にこれからの結果を俟つて、江湖の諸賢に判斷して戴くより外はない。

昔、私があの舊譯を企てた頃は、私の年齢は漸く五十歳に達したばかりで、氣力も體力も旺盛であつたから、山田孝雄博士に校閲をお願いした以外は殆ど獨力で事に當り、纔かに第二十六卷の編成だけを、中央公論社の若き文學士故相澤正君に委ねたに過ぎなかつたが、今はもう年老いた上に、中央公論社が内外の狀勢などを考へ合せて出版を急ぎ、短時日のうちに刊行を終へることを期してゐるので、

自然私も助手の力を借りなければならぬ。で、私は平素敬慕する新村出博士に相談し、博士の推輓に依つて、京大出の新進國學者玉上琢彌、榎克朗、宮地裕の三氏の協力を得ることになつたが、これには澤瀉久孝博士の蔭の斡旋などもあつたことゝ察せられる。三人もの人を頼んだのは、最初榎氏一人であつたのが、中途で同氏が病氣になつたので、次に宮地氏を頼み、更に玉上氏が加はることになつたのである。誤譯や脱漏の發見には、一人の人間が繰り返して調べるよりも、多くの人の眼に觸れた方が見落しが少いと云ふこともあるし、前記の事情で功を早く收めるために、大體三人が受持をきめ、分擔して仕事するやうにしたのである。でも、斷つて置くが、三氏の仕事は主として誤譯や脱漏や歪曲等がありはしないかを舊譯本について吟味し、私に注意を與へること、及び系圖、年立、梗概等を作成することにあつて、翻譯そのものは何處迄も私が單獨で行ふのである。

往年の山田孝雄博士は、あれから戦争と戦後の時代を經、眼まぐるしい幾變轉の波の中をくぐり抜けて、七十有餘の高齡に達せられた今日も、矍鑠として學問の道にいそしんでをられるので、今回も亦校閲の任に當つて戴く。そして今回も前回と同様、單なる名義だけの校閲者ではなくて、實際に全部を校閲し、手を入れられる。原稿の出來上る過程を云へば、先づ玉上氏以下三氏が舊譯本の疑問とする箇所をマークして私に示し、私がそれを適當に參酌しつゝ譯文を作成し、最後にそれを山田博士の許へ送る。博士はそれをあらゆる角度から検討し、全般的に斧鉞を加へて私に返す。私は博士の朱筆

を見て更に修正や彫琢を施し、必要があれば猶何回でも博士の許に送つて再三の校閲を乞ひ、完璧を期する。と、斯様な順序を取ることにした。装釘と地模様は、前田青邨畫伯を煩はした。實は中央公論社は戦災を免れたので、舊譯本の装釘や地模様に用ひた故長野草風畫伯の畫稿や原版も残つてゐるのであるが、舊譯の餘臭を悉く去つて面目を一新する方がよいと思ひ、故畫伯の先輩で且親交のあつた青邨氏にお願ひしたところ、幸ひに同氏の快諾を得た。題簽や中扉の文字を變へたのも同じ心からであるが、装釘の文字は矢張装釘に最も調和する書體を選ぶことが第一であると考へたので、これも青邨畫伯にお願ひすることにした。それにつけても、山田老博士の健在せらるゝに引きかへ、草風畫伯と相澤正君の二人が物故せられたことはまことに淋しい。

なほ舊譯本は本文が二十三冊、和歌講義が二冊、系圖、年立、梗概が一冊で、全部で二十六冊であつたが、新譯本は紙を節約するために字詰めを多くして冊數を少くし、ほゞ舊譯本の二冊分を一冊に收め、和歌講義を別冊にせず本文の頭注に組み入れ、系圖、年立、梗概だけを別冊にして、全部を十一冊とすることにした。

摺筆に臨み、私は此の新譯の刊行が、山田博士や青邨畫伯を始めとして玉上氏以下三氏の協力に俟つものであることを思ひ、又一方では中央公論社の前社長嶋中雄作氏と現社長鵬二氏と、父子二代に互る庇護と激勵とに依るものであることを思つて、以上の諸氏に深く感謝するものであるが、而も時勢

の要求と、一般讀者層の支持とがなければ企て得られない事業であることに考へ及ぶと、誰よりも先づ世間の古典文學愛好者諸氏に對してお禮を申したのである。

昭和二十六年二月

熱海雪後庵に於いて

潤一郎しるす

例言

一、此の書は獨立した一箇の作品として味はつて貰ふのが本旨であつて、なるべく現代人が普通の現代作品に對するやうに、一字一句の詮索に囚はれずに、安易な氣持で讀んで貰ひたいのである。それ故、本來ならば頭注等も施したくはないのだけれども、全然省略するのも不親切であるし、實際に於いて不便でもあるから、矢張説明があつた方がよいと思はれる事項には、注を加へることにした。しかし此の書を讀むくらゐの人なら當然知つてゐさうなことで、知らないでも讀んで行くうちに自然と會得しさうなことで、又は字引を引きさへすれば容易に分る筈のことなどは、そのまゝにしてあるところもある。

一、たとへば、本文の中にはしばしば古い詩の文句だの和歌の文句だの、一節を引用したり、又はさう云ふ故人の作に基づいて和歌を詠んだり、洒落を云つたりしてあるところがある。それらは、そのものと詩や和歌を知らないでも、「何か典據があるんだな」と思ひ及びさへすれば、大體何を云

はうとしてゐるのか察しがつく筈のことだけれども、でも知つてゐれば一層理解を助けもし、感興を補ふことにもなるので、ごく簡単に典故を挙げ、長い詩などはその前後の數節を、和歌はその一首の全體を記すことにした。但し、和歌の場合に原典が明かでないものは、『花鳥餘情所引』『河海抄所引』といふ風に、それを引用してゐる注釋書の名を挙げた。

一、此の物語の中で、一番讀者が混雜を起し易く、従つて、一番説明を要するものは、登場人物の呼び方であると思ふ。現代人が考へると不思議なことなのであるが、此の大長篇の中に出て來る多くの人物のうちで、本當の名前が分つてゐるものは極めて少い。主人公である源氏の君にしてからが、源姓であることは分つてゐるが、源の何と云ふ人であつたか、その正しい名は何處にも擧げてない。「光君」と云ふのは、時の人が渾名あだなをつけてさう呼んだと云ふだけなので、もとより本名ではないのであるが、その渾名すら、此の人を呼ぶのに用ひられてゐる場合は殆どない。宇治十帖の主人公の「薰君」なども同様である。男子が既にさうであるから、女子は尙更で、「紫の上」とか「空蟬」とか「夕顔」とか云ふ名は、恐らく物語の世界での渾名でさへもなく、作者が便宜上さう呼んでゐるに過ぎないやうに察せられる。渾名でも假の名でも、兎に角名前らしいものがあるのはよいが、大部分の人物にはさう云ふものすらも與へられてゐない。では如何にして人と人とを區別するかと云ふのに、男の場合には「左大臣」ひだりのおとどとか「中將の君」とか云ふ風に官名を以て呼び、女の場合には